

お彼岸花の物語



さて 此処は
相模の国の街道沿い
戦国時代も 末のころ
大山参りの道中に
観音苦行と呼ばわれた
起伏激しい 巡礼泣かせ
裂の口峠が あったとさ

昼なお暗い この辺り

見るもおぞましい 山姥やまんばが

現れ出でては 旅人を

食い殺すとの 噂たち

土地者さえも 寄り付かぬ

巡礼行者は 声高に

念仏唱えて 駆け抜ける

うわさ聞きつけ 武士もののふの

相模さがみノ次郎悪源太あくげんた

大刀腰に 登り行く

昼なお暗い 山道は

夏というのに 肌寒い

山鳥騒ぎ 山姥が

樹上はるかに 現れた

耳まで裂けし 赤い口

火を吐くように 雄叫おたけびびて

悪源太にぞ 襲いかかる

怖気おしげも見せず 抜き打ちの

右袈裟懸けに妖怪を

ズンバラリンと切り捨てた
さすが武士 悪源太

地に倒れ伏した 山姥が
とどめ刺さんと近寄りし
武士に向かい悔しげに

おのれ無念なり 十年前

科なき娘を切り捨てた

敵に出会うたに 返り討ち

あな 悔しやなと 息絶える

これを耳にした 悪源太

十年前の 初陣の

敵軍勢との 戦いで

国境なる かの村で

小屋の陰より 走りいでし
娘を不覚にも 切りすてた
この山姥が その母か

)

許してくれよ 母娘

これが いくさの習いなり
意趣遺恨など なけれども
科なきものを 切り捨てて
罪なきものの 命とる

これぞ 刀の穢けがれなり

男泣きする 悪源太

相模ノ次郎 悪源太

山姥を 手厚くほおむりて
誓いととも 身に帯びた
刀 ふたふり 手向けして
巡礼姿に 身をやつし

何処いずこともしれず 旅立った

それは彼岸の 迫るころ

月日は流れ 幾星霜

大山参りの 人々に

山姥のうわさ 今はなく

彼岸中日 巡るころ

真っ赤に燃えた 彼岸花

観音苦行の 道端に

二輪並んで 咲いたとさ



語り伝える 人もない

今は昔の物語

遠い昔の物語

【一言】

私の住む相模原「作の口」サクノクチには「観音苦行」と呼ばれる狭く短い坂道があり「大山道、観音苦行」と彫られた石碑がたつています。自動車道路や住宅地のために整地され平坦な土地になっていますが、昔は関東ローム層の凹凸激しい地形だったろうと思います。ここへ越しできて「作の口」という地名が気になつていました。

彼岸花をテーマに詩を作ろうと思つたとき、この話が脳裏に浮かびました。

私が観音苦行の坂道でお彼岸花を見つけたのは、一昨年のことでした。昨年は見ませんでした。今年は咲くでしょうか？

・・・平和な世界がきますように・・・

二〇〇三・〇六・〇八・U P

二〇〇七・〇一・二十九・リニユーアル